

Cheeger–Simonsを読む

Ken Shiozaki

May 16, 2025

Abstract

[1]を追う。証明など詳細は[2]が詳しい。

1 微分キャラクター

1.1 \mathbb{R} の proper subring とは

Λ を \mathbb{R} の proper subring とする。つまり、 $\Lambda \subset \mathbb{R}, \Lambda \neq \mathbb{R}$ であり、 Λ は掛け算と足し算について閉じる。

Proposition 1.1. 加法群 $\Lambda \subset \mathbb{R}$ がある非自明な开区間 (a, b) を含むならば、 $\Lambda = \mathbb{R}$ 。

(証明) $a < b$ とする。 $\frac{a+b}{2} \in \Lambda$ に注意。 Λ は加法群であるため、 $(\frac{a-b}{2}, \frac{b-a}{2}) = \{x - \frac{a+b}{2} \in \mathbb{R} \mid x \in (a, b)\} \subset \Lambda$ である。任意の実数 $r \in \mathbb{R}$ に対して、 $\frac{1}{n}r \in (\frac{a-b}{2}, \frac{b-a}{2})$ なる整数 n が存在する。□

よって Λ は連続区間を含まない。 Λ は離散であるか、稠密であるかのどちらかである。ここで、部分集合 $S \subset \mathbb{R}$ が離散であるとは、任意の $x \in S$ に対して、ある $\epsilon > 0$ が存在して ϵ 近傍 $(x - \epsilon, x + \epsilon)$ には x 以外の S の点が含まれないことを指す。また、部分集合 $S \subset \mathbb{R}$ が稠密であるとは、任意の $x \in S$ と任意の $\epsilon > 0$ に対して、 $y \in S$ が存在して $|x - y| < \epsilon$ となる、つまりいくらでも近い点が S 内に存在することを指す。定義より、部分集合 $S \subset \mathbb{R}$ は離散かつ稠密でありえない。

Proposition 1.2. 任意の加法部分群 $\Lambda \in \mathbb{R}$ は、離散か稠密である。

(証明) Λ が離散でないを仮定する。つまり、ある $x \in \Lambda$ が存在して、 x にいくらでも近い点が Λ 内に存在する。(任意の $\epsilon > 0$ に対して $(x - \epsilon, x + \epsilon) \cap \Lambda \neq \emptyset$.) Λ は加法群であるから、 $x = 0$ として良い。よっていくらでも0に近い点が Λ 内に存在する。(任意の $\epsilon > 0$ に対して $|x| < \epsilon$ なる $x \in \Lambda$ が存在する.) このような x の整数倍を用いて、任意の実数 $r \in \mathbb{R}$ を任意精度で近似できる、つまり、任意の $\epsilon > 0$ に対して、ある $x \in \Lambda, n \in \mathbb{Z}$ が存在して $|r - nx| < \epsilon$ かつ $nr \in \Lambda$ とできるから、 Λ は稠密である。□

Proposition 1.3. 任意の離散加法部分群 $\Lambda \in \mathbb{R}$ は、 $\Lambda = \alpha\mathbb{Z}$ である。

(証明) Λ は離散であるから、ある $\epsilon > 0$ に対して、 $\alpha = \min_{x, y \in \Lambda, x \neq y} |x - y| > \epsilon$ 。加法性より $\alpha \in \Lambda, \alpha\mathbb{Z} \subset \Lambda$ である。 $x \notin \alpha\mathbb{Z}$ なる $x \in \Lambda$ の存在を仮定すると、 α の定義に反する。□

一方で、稠密な Λ は有理数全体の集合 \mathbb{Q} とは限らない。例えば、 $\mathbb{Z} + \sqrt{2}\mathbb{Z} = \{n + m\sqrt{2} \mid n, m \in \mathbb{Z}\}$ は明らかに加法部分群であるが、無理数を含みまた $\alpha\mathbb{Z}$ でもないため離散ではなく稠密。また、 $(n + \sqrt{2}m)(n' + \sqrt{2}m') = (nn' + 2mm') + \sqrt{2}(nm' + mn')$ $\in \mathbb{Z} + \sqrt{2}\mathbb{Z}$ であるので、 $\mathbb{Z} + \sqrt{2}\mathbb{Z}$ は部分環である。

1.2 準備

1.2.1 記号 p, r, ι

短完全列

$$0 \rightarrow \Lambda \xrightarrow{r} \mathbb{R} \xrightarrow{p} \mathbb{R}/\Lambda \rightarrow 0. \quad (1.1)$$

射影 $p: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}/\Lambda$, 埋め込み $r: \Lambda \rightarrow \mathbb{R}$ はそれぞれコチェインへの準同型写像

$$p_*: C^k(M, \mathbb{R}) \rightarrow C^k(M, \mathbb{R}/\Lambda), \quad (p_*f)(\sigma) := p(f(\sigma)), \quad (1.2)$$

$$r_*: C^k(M, \Lambda) \rightarrow C^k(M, \mathbb{R}), \quad (r_*f)(\sigma) := r(f(\sigma)), \quad (1.3)$$

を誘導する. いずれもチェインマップである:

$$((p_*\delta_{\mathbb{R}} - \delta_{\mathbb{R}/\Lambda}p_*)f)(\sigma) = p(\delta_{\mathbb{R}}f(\sigma)) - (p_*f)(\partial\sigma) = p(f(\partial\sigma)) - p(f(\partial\sigma)) = 0, \quad (1.4)$$

$$((r_*\delta_{\Lambda} - \delta_{\mathbb{R}}r_*)f)(\sigma) = r(\delta_{\Lambda}f(\sigma)) - (r_*f)(\partial\sigma) = r(f(\partial\sigma)) - r(f(\partial\sigma)) = 0. \quad (1.5)$$

de Rham 準同型を

$$\iota: \Omega^k(M) \rightarrow C^k(M, \mathbb{R}), \quad \omega \mapsto \iota(\omega) = \left(\sigma \mapsto \int_{\sigma} \omega \right) \quad (1.6)$$

と定義する. ι もチェインマップである:

$$((\iota d - \delta_{\mathbb{R}}\iota)\omega)(\sigma) = \int_{\sigma} d\omega - \iota\omega(\partial\sigma) = \int_{\sigma} d\omega - \int_{\partial\sigma} \omega = 0. \quad (1.7)$$

以下, 文脈から明らかな場合は $\delta_{\mathbb{R}}, \delta_{\Lambda}, \delta_{\mathbb{R}/\Lambda}$ は全て δ と書く.

1.2.2 射影的对象

一般に, 自由アーベル群 P に対して $\text{Hom}(P, -)$ は完全関手であり, 以下が短完全列:

$$0 \rightarrow \text{Hom}(P, \Lambda) \xrightarrow{r_*} \text{Hom}(P, \mathbb{R}) \xrightarrow{p_*} \text{Hom}(P, \mathbb{R}/\Lambda) \rightarrow 0. \quad (1.8)$$

よって,

- $f \in \text{Hom}(P, \Lambda)$ に対して $r_*f = 0$ ならば $f = 0$.
- $g \in \text{Hom}(P, \mathbb{R})$ に対して $p_*g = 0$ ならば, ある $f \in \text{Hom}(P, \Lambda)$ が存在して $g = r_*f$.
- (自由アーベル群の射影的性質) 任意の $f \in \text{Hom}(P, \mathbb{R}/\Lambda)$ に対してある $\tilde{f} \in \text{Hom}(P, \mathbb{R})$ が存在して $f = p_*\tilde{f}$:

$$\begin{array}{ccc} & & \mathbb{R} \\ & \nearrow \exists \tilde{f} & \downarrow \\ P & \xrightarrow{f} & \mathbb{R}/\Lambda \end{array} \quad (1.9)$$

以下では $P = C_k(M), Z_k(M)$ として上の事実を用いる. ($C_k(M)$ は立方体 $\sigma: I^k \rightarrow M$ の集合を基底とする自由アーベル群であり, 一般論として, 自由アーベル群の部分群は自由アーベル群.)

1.2.3 単射の対象

一般論として、 \mathbb{R} は \mathbb{Z} 加群として単射の対象。よって、単射 $A \rightarrow B$ と準同型 $A \rightarrow \mathbb{R}$ に対して以下を可換にする \tilde{f} が存在する。

$$\begin{array}{ccc}
 & B & \\
 \nearrow & | & \\
 A & \xrightarrow{f} & \mathbb{R} \\
 & \downarrow \tilde{f} & \\
 & \mathbb{R} &
 \end{array}
 \quad (1.10)$$

以下では

$$\begin{array}{ccc}
 & C_k(M) & \\
 \nearrow & | & \\
 Z_k(M) & \xrightarrow{f} & \mathbb{R} \\
 & \downarrow \tilde{f} & \\
 & \mathbb{R} &
 \end{array}
 \quad (1.11)$$

の形で用いる。

1.2.4 $f|_{Z_k} = 0$ ならば $f = \delta g$ について

- 以下をアーベル群の完全列とする。

$$0 \rightarrow A \xrightarrow{f} B \xrightarrow{g} C. \quad (1.12)$$

$\text{Hom}(M, -)$ は左完全な共変関手である。つまり、以下は完全列：

$$0 \rightarrow \text{Hom}(M, A) \xrightarrow{f_*} \text{Hom}(M, B) \xrightarrow{g_*} \text{Hom}(M, C). \quad (1.13)$$

(証明) $\alpha : M \rightarrow A$ に対して、 $f_*\alpha = f \circ \alpha = 0$ とする。すると、任意の $m \in M$ に対して $0 = f_*\alpha(m) = f(\alpha(m))$ であるが、 f は単射であるから $\alpha(m) = 0$ より $\alpha = 0$ 。 $\alpha : M \rightarrow A$ とする。 $g \circ f = 0$ より $m \in M$ に対して $g_*f_*\alpha(m) = g \circ f(\alpha(m)) = 0$ であるから $g_*f_* = 0$ 。 $\beta : M \rightarrow B$ に対して $g_*\beta = 0$ とする。 $m \in M$ に対して $g_*\beta(m) = g(\beta(m)) = 0$ 。 $\ker g = \text{im } f$ であるからある $a_m \in A$ が存在して $\beta(m) = a_m$ 。対応 $m \mapsto a_m$ の準同型性は β の線形性より： $a_m + a_{m'} = \beta(m) + \beta(m') = \beta(m + m') = a_{m+m'}$ 。 \square

- 以下をアーベル群の完全列とする。

$$M \xrightarrow{f} N \xrightarrow{g} L \rightarrow 0. \quad (1.14)$$

$\text{Hom}(-, A)$ は左完全な反変関手である。つまり、以下は完全列：

$$\text{Hom}(M, A) \xleftarrow{f^*} \text{Hom}(N, A) \xleftarrow{g^*} \text{Hom}(L, A) \leftarrow 0. \quad (1.15)$$

Wiebelの教科書をみると、「 $\text{Hom}_{\mathcal{A}}(A, M) = \text{Hom}_{\mathcal{A}^{\text{op}}}(M, A)$ より。」とのみ書かれているが、直接証明を確認する。

(証明) $\gamma : L \rightarrow A$ に対して、 $g^*\gamma = 0$ とすると任意の $n \in N$ に対して $g^*\gamma(n) = \gamma(g(n)) = 0$ 。 g は全射であるから $\gamma = 0$ 。 $\gamma : L \rightarrow A$ に対して、 $f^*g^*\gamma(m) = \gamma(f \circ g(m)) = \gamma(0) = 0$ であるので $f^*g^* = 0$ 。 $\beta \in \ker f^*$ とする。つまり、任意の $m \in M$ に対して $f^*\beta(m) = \beta(f(m)) = 0$ 。つまり、 β は $\text{im } f = \ker g$ 上ではゼロ。 g は全射であるから、任意の $l \in L$ に対して $l = g(n_l)$ なる $n_l \in N$ が存在する。 $\gamma : L \rightarrow A$ を

$$\gamma(l) = \beta(g(n_l)) = g^*\beta(n_l) \quad (1.16)$$

と定義する. Well-definedであることは, $g(n'_l) = g(n_l)$ とすると $n_l - n'_l \in \ker g = \text{im } f$ より $g^*(\beta(n_l)) - g^*(\beta(n'_l)) = \beta(g(n_l - n'_l)) = 0$. 準同型性は $g(n_l + n_{l'}) = g(n_l) + g(n_{l'}) = l + l'$ より $n_{l+l'} = n_l + n_{l'}$ から. \square

後者を以下に適用する. Z_k の定義より次は完全列:

$$0 \rightarrow Z_k(M) \xrightarrow{i} C_k(M) \xrightarrow{\partial} B_{k-1}(M) \rightarrow 0. \quad (1.17)$$

アーベル群 A に対して関手 $\text{Hom}(-, A)$ の左完全性より以下は完全列:

$$\text{Hom}(Z_k(M), A) \xleftarrow{i^*} \text{Hom}(C_k(M), A) \xleftarrow{\partial^*(=\delta)} \text{Hom}(B_{k-1}(M), A) \leftarrow 0. \quad (1.18)$$

ここで i^* は制限写像である. 上を適用すると $\ker i^* = \text{im } \delta$. よってコチェイン $f: C^k(M, A)$ が $Z_k(M)$ への制限に対して $i^*f = f|_{Z_k(M)} = 0$ を満たすとき, ある $g: B_{k-1} \rightarrow A$ が存在して

$$f = \delta g = g \circ \partial \quad (1.19)$$

と書くことができる. 特に, $A = \mathbb{R}$ のときは \mathbb{R} の単射性より定義域を $C_{k-1}(M)$ に拡張することができる. 結局, 以下が示された:

- $f \in C^k(M, \mathbb{R})$ の $Z_k(M)$ への制限がゼロ, $f|_{Z_k(M)} = 0$, であるならば, ある $g \in C^{k-1}(M, \mathbb{R})$ が存在して $f = \delta g$.

以下の形も用いる.

$$\text{Hom}(Z_k(M), \mathbb{R}/\Lambda) \xleftarrow{i^*} \text{Hom}(C_k(M), \mathbb{R}/\Lambda) \xleftarrow{\partial^*(=\delta)} \text{Hom}(B_{k-1}(M), \mathbb{R}/\Lambda) \leftarrow 0. \quad (1.20)$$

1.3 $p_*\iota$ は単射

k 形式 $\omega \in \Omega^k(M)$ に対して $p_*\omega = 0$ であれば $\ker p_* = \text{im } r_*$ よりある $c \in C^k(M, \Lambda)$ が存在して

$$\omega = r_*c. \quad (1.21)$$

これは任意の特異立方体 $\sigma: I^k \rightarrow M$ に対して

$$\int_{\sigma} \omega = c(\sigma) \in \Lambda \quad (1.22)$$

と等価であるが, 真部分環 Λ は連続区間 (a, b) を含まないので, 仮に ω が非ゼロの k 形式とすると, 矛盾する. よって,

$$\omega = 0 \quad (1.23)$$

が成立するため,

$$p_*\iota: \Omega^k(M) \rightarrow C^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \quad (1.24)$$

は単射. また, r_* の単射性より

$$\omega = r_*c \Rightarrow c = 0 \quad (1.25)$$

も従う.

1.3.1 Bockstein準同型

$$B : H^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \rightarrow H^{k+1}(M, \Lambda) \quad (1.26)$$

をBockstein準同型とする. 具体的には, $a \in Z^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ に対して $p_*\tilde{a} = a$ なる $\tilde{a} \in C^k(M, \mathbb{R})$ をひとつ選び, $p_*\delta\tilde{a} = \delta p_*\tilde{a} = \delta a = 0$ より $\delta\tilde{a} = r_*c$ なる $c \in C^k(M, \Lambda)$ が存在するが,

$$B([a]) := [c] \quad (1.27)$$

と定義される. $r_*\delta c = 0$ より c はコサイクルであることに注意. 取り替え $\tilde{a} \mapsto \tilde{a} + r_*b, b \in C^k(M, \Lambda)$ から生じる変化分は $\delta r_*b = r_*\delta b$ よりコバウンダリ. 取り替え $a \mapsto a + \delta d = a + d \circ \partial$ から生じる変化分は, $d : B_{k-1} \rightarrow \mathbb{R}/\Lambda$ の $C_{k-1} \rightarrow \mathbb{R}$ への拡張を $\tilde{d} \in C^{k-1}(M, \mathbb{R})$ と書くと, $p_*\delta\tilde{d} = \delta d$. すると $\delta\tilde{a} \mapsto \delta\tilde{a} + \delta^2\tilde{d} = \delta\tilde{a}$ となり, a の取り方には依存しない.

1.4 メモ

Abel群 G が可除 (divisible) とは, 任意の $g \in G$, 任意の $n \in \mathbb{N}$ に対して, ある $h \in G$ が存在して $nh = g$ なること. つまり, 任意の元が非ゼロの整数で割れるということ.

Abel群 G が単射的 (injective) であるとは, 任意の単射準同型 $f : A \rightarrow B$ と任意の準同型 $g : A \rightarrow G$ に対して, ある準同型 $h : B \rightarrow G$ が存在して $f = g \circ i$ なること.

Abel群 G が可除であることと単射的であることは同値.

\mathbb{R} は \mathbb{Z} 加群として単射的.

自由 \mathbb{Z} 加群は射影的.

1.5 微分キャラクターの構造定理

Definition 1.4.

$$\hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) := \{f \in \text{Hom}(Z_k(M), \mathbb{R}/\Lambda) \mid \exists \omega_f \in \Omega^{k+1}(M) \text{ s.t. } f \circ \partial = p_*\omega_f\}. \quad (1.28)$$

ここで,

$$C_{k+1}(M) \xrightarrow{\partial} B_k(M) \subset Z_k(M) \xrightarrow{f} \mathbb{R}/\Lambda \quad (1.29)$$

に注意. [1]のTheorem 1.1を少しずつ追う.

Proposition 1.5. $f \in \text{Hom}(Z_k(M), \mathbb{R}/\Lambda)$ に対して, ある $T_f \in C^k(M, \mathbb{R})$ が存在して,

$$p_*T_f|_{Z_k(M)} = f. \quad (1.30)$$

(証明) まず, 任意の準同型写像 $f : Z_k(M) \rightarrow \mathbb{R}/\Lambda$ は準同型写像 $\tilde{f} : Z_k(M) \rightarrow \mathbb{R}$ に拡張できることに注意する. まず, $Z_k(M) \subset C_k(M)$ であり, $C_k(M)$ は (非退化) 立方体 $\sigma : I^k \rightarrow M$ によって生成される自由アーベル群であり, 一般論として自由アーベル群の部分群は自由アーベル群であるから, $Z_k(M)$ も基底をもつ, つまり, 集合 S によって生成される自由アーベル群である. 各 $s \in S$ に対してリフト $\mathbb{R}/\Lambda \ni f(s) \mapsto \tilde{f}(s) \in \mathbb{R}$ をひとつ決めて,

$$\tilde{f}(s) := \widetilde{f(s)} \quad (1.31)$$

と定義し、一般の $\sigma \in Z_k(M)$ に対しては線形に拡張する。よって

$$p_* \tilde{f} = f \quad (1.32)$$

なる \tilde{f} が得られた¹：

$$\begin{array}{ccc} & & \mathbb{R} \\ & \nearrow \exists \tilde{f} & \downarrow \\ Z_k(M) & \xrightarrow{f} & \mathbb{R}/\Lambda \end{array} \quad (1.33)$$

\mathbb{R} は可除であるから、単射的であり、単射 $Z_k(M) \rightarrow C_k(M)$ に対して、準同型写像 $\tilde{f} : Z_k(M) \rightarrow \mathbb{R}$ の定義域を拡張できる：

$$\begin{array}{ccc} & C_k(M) & \\ & \nearrow & \downarrow \exists T_f \in C^k(M, \mathbb{R}) \\ Z_k(M) & \xrightarrow{\tilde{f}} & \mathbb{R} \end{array} \quad (1.34)$$

よって

$$T_f|_{Z_k(M)} = \tilde{f} \quad (1.35)$$

なる T_f が得られた。(制限写像と p_* は可換であるから、 $p_*(T_f|_{Z_k(M)}) = (p_* T_f)|_{Z_k(M)}$ であり、 $p_* T_f|_{Z_k(M)}$ と書くことが正当化されることに注意。) \square

以下、 T_f を f の表現と呼ぶことがある。

Proposition 1.6. $f \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ に対して、 $f \circ \partial = p_* \omega_f$ なる $\omega_f \in \Omega^{k+1}(M)$ は閉形式、かつ Λ 周期。つまり、

$$d\omega_f = 0, \quad (1.36)$$

$$\int_{\sigma} \omega_f \in \Lambda \text{ for all } \sigma \in Z_{k+1}(M). \quad (1.37)$$

(証明) $f = p_* T_f|_{Z_k(M)}$ なる $T_f \in C^k(M, \mathbb{R})$ をひとつ選ぶ。 $\partial C_{k+1}(M) = B_k(M) \subset Z_k(M)$ に注意すると、

$$p_* \delta T_f = \delta p_* T_f = p_* T_f \circ \partial = f \circ \partial = p_* \omega_f. \quad (1.38)$$

よって、ある $c_f \in C^{k+1}(M, \Lambda)$ が存在して、

$$\delta T_f = \omega_f - r_* c_f. \quad (1.39)$$

これから

$$0 = \delta^2 T_f = \delta \omega_f - \delta r_* c_f = \iota d\omega_f - r_* \delta c_f, \quad (1.40)$$

つまり、

$$\iota d\omega_f = r_* \delta c_f. \quad (1.41)$$

よって1.3節の議論より

$$d\omega_f = 0, \quad \delta c_f = 0. \quad (1.42)$$

¹一般論(1.9)を適用するだけだが、構成的な証明をメモした。

Λ 周期性は任意の $\sigma \in Z_{k+1}(M)$ に対して,

$$\int_{\sigma} \omega_f = (\iota \omega_f)(\sigma) = (\delta T_f + r_* c_f)(\sigma) = (r_* c_f)(\sigma) \in \Lambda \quad (1.43)$$

より. □

Λ 周期の閉形式を

$$\Omega_{\text{cl}}^k(M)_{\Lambda} := \{\omega \in \Omega_{\text{cl}}^k(M) \mid \int_{\sigma} \omega \in \Lambda \text{ for all } \sigma \in Z_k(M)\} \quad (1.44)$$

$$= \{\omega \in \Omega^k(M) \mid d\omega = 0, \int_{\sigma} \omega \in \Lambda \text{ for all } \sigma \in Z_k(M)\} \quad (1.45)$$

と書く. 微分キャラクターの定義は,

$$\hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) = \{f \in \text{Hom}(Z_k(M), \mathbb{R}/\Lambda) \mid \exists \omega_f \in \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_{\Lambda} \text{ s.t. } f \circ \partial = p_* \iota \omega_f\} \quad (1.46)$$

と書き換えることができる.

Proposition 1.7. ω_f は一意. 同じことだが, $p_* \iota : \Omega^{k+1}(M) \rightarrow C^{k+1}(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ は単射.

(証明) ω'_f も $f \circ \partial = p_* \iota \omega'_f$ を満たすとすると, $p_* \iota(\omega_f - \omega'_f) = 0$ であるが, $p_* \iota$ は単射であるので. □

c_f の定めるコホモロジー類を

$$u_f := [c_f] \in H^{k+1}(M, \Lambda) \quad (1.47)$$

と書く.

$$[\iota \omega_f] = [r_* c_f] = r_* [c_f] = r_* u_f \quad (1.48)$$

に注意.

Proposition 1.8. u_f は一意.

(証明) c_f は関係式

$$r_* c_f = \delta T_f - \iota \omega_f \quad (1.49)$$

により定まる. ω_f は一意であるが, T_f に任意性がある. $T'_f \in C^k(M, \mathbb{R})$ を $p_* T'_f|_{Z_k(M)} = f$ を満たす別の選び方とし,

$$r_* c'_f = \delta T'_f - \iota \omega_f \quad (1.50)$$

とする. すると,

$$p_*(T_f - T'_f)|_{Z_k(M)} = 0. \quad (1.51)$$

よってある $d : Z_k(M) \rightarrow \Lambda$ が存在して,

$$(T_f - T'_f)|_{Z_k(M)} = r_* d_0. \quad (1.52)$$

準同型 $r_*d_0 : Z_k \rightarrow \mathbb{R}$ は \mathbb{R} の \mathbb{Z} 加群としての単射性より定義域を拡張でき,

$$r_*d_0 = d_1|_{Z_k(M)} \quad (1.53)$$

なる $d_1 \in C^k(M, \mathbb{R})$ が存在する. よって,

$$(T_f - T'_f - d_1)|_{Z_k(M)} = 0. \quad (1.54)$$

すると 1.2.4 節の注意よりある $s \in C^{k-1}(M, \mathbb{R})$ が存在して

$$T_f - T'_f - d_1 = \delta s. \quad (1.55)$$

よって,

$$r_*(c'_f - c_f) = \delta T'_f - \delta T_f = -\delta d_1 \quad (1.56)$$

はコバウンダリであるから, r_* の単射性より

$$[c'_f] = [c_f]. \quad \square \quad (1.57)$$

$f \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ から ω_f, u_f が一意的に定まることが示された. 表現 T_f の不定性も整理しておく.

Proposition 1.9. f の表現 T_f の不定性は,

$$T_f \mapsto T_f + r_*d + \delta s, \quad d \in C^k(M, \Lambda), \quad s \in C^{k-1}(M, \mathbb{R}). \quad (1.58)$$

(証明) 逆に辿る. $T = T'_f - T_f$ は

$$p_*T|_{Z_k(M)} = 0 \quad (1.59)$$

を満たす. 完全列 (1.20) より,

$$p_*T = \delta b, \quad b \in C^{k-1}(M, \mathbb{R}/\Lambda) \quad (1.60)$$

と書くことができる. さらに $b \mapsto s \in C^{k-1}(M, \mathbb{R}), p_*s = b$ を取ると

$$p_*T = \delta p_*s = p_*\delta s, \quad s \in C^{k-1}(M, \mathbb{R}). \quad (1.61)$$

よって $p_*(T - \delta s) = 0$ であるから, $d \in C^k(M, \Lambda)$ が存在して

$$T - \delta s = r_*d. \quad \square \quad (1.62)$$

さて,

$$\delta_1 : \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \rightarrow \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda, \quad \delta_1(f) := \omega_f, \quad (1.63)$$

$$\delta_2 : \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \rightarrow H^{k+1}(M, \Lambda), \quad \delta_2(f) := u_f = [c_f], \quad (1.64)$$

と定義する.

Proposition 1.10. $\omega \in \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda$ は $u \in H^{k+1}(M, \Lambda)$ を定める.

(証明) $\omega \in \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda$ とする. Λ 周期性より $p_*\omega|_{Z_k(M)} = 0$. 完全列 (1.20) において $\omega \in \ker i = \text{im } \delta$ であるから,

$$\exists T : B_k(M) \rightarrow \mathbb{R}/\Lambda \quad \text{s.t.} \quad p_*\omega = \delta T. \quad (1.65)$$

$B_k(M)$ は自由 \mathbb{Z} 加群であるから $\tilde{T} : B_k(M) \rightarrow \mathbb{R}$ が存在して $p_*\tilde{T} = T$ である。よって、

$$p_*(\iota\omega - \delta\tilde{T}) = 0. \quad (1.66)$$

よってある $c \in C^{k+1}(M, \Lambda)$ が存在して

$$\iota\omega - \delta\tilde{T} = r_*c. \quad (1.67)$$

$r_*\delta c = 0$ と r_* の単射性より $u = [c]$ が定まる。 T' を別の選び方として $r_*c' = \iota\omega - \delta T'$ とすると $r_*(c - c') = -\delta(T - T')$ であり、 u は一意。 \square

Proposition 1.11. $u \in H^{k+1}(M, \Lambda)$ は $[\omega] \in H_{\text{dR}}^{k+1}(M)$, $\omega \in \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda$ を定める。

(証明) $u \in H^{k+1}(M, \Lambda)$ に対して $r_*u \in H^{k+1}(M, \mathbb{R})$. 同型 $\iota^{-1} : H^{k+1}(M, \Lambda) \cong H_{\text{dR}}^{k+1}(M)$ により $\iota^{-1}(r_*u) = [\omega]$ なる $[\omega] \in H_{\text{dR}}^{k+1}(M)$ が存在する。 $u = [c]$ とすると、 $r_*c = \iota\omega + \delta T$ であるから、

$$\int_{z \in Z_{k+1}(M)} \omega = (r_*c - \delta T)(z) = c(z) \in \Lambda \quad (1.68)$$

より ω は Λ 周期。 \square

Proposition 1.12. δ_1, δ_2 は全射。

(証明) 上記の2命題より、 $\omega \in \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda, u \in H^{k+1}(M, \Lambda)$ のどちらか一方が与えられると $[\omega] = r_*u$ なる ω, u の対が定まる。 $u = [c], c \in C^{k+1}(M, \Lambda)$ とすると

$$\delta T = \iota\omega - r_*c, \quad T \in C^k(M, \mathbb{R}) \quad (1.69)$$

が定まる。さて

$$f := p_*T|_{Z_k(M)} \quad (1.70)$$

とする。すると

$$f(\partial\sigma \in B_k(M) \subset Z_k(M)) = p_*T(\partial\sigma) = p_*\delta T(\sigma) = p_*(\iota\omega - r_*c)(\sigma) = p_*\iota\omega(\sigma) \quad (1.71)$$

より $f \circ \partial = p_*\iota\omega$ となり、 $f \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$.

c の取り替えに依存しないことを示すために、まず f が T の選び方に依存しないことを示す。 $T \mapsto T + \delta S$ に対して

$$f(z \in Z_k(M)) = p_*T(z) \mapsto p_*T(z) + p_*\delta S(z) = p_*T(z) + p_*S(\partial z) = p_*T(z) \quad (1.72)$$

より f は $[T] \in H^k(M, \mathbb{R})$ にのみ依存する。また、 $c \mapsto c + \delta b$ は $T \mapsto T + \delta r_*b$ に他ならないため、 f は $u = [c] \in H^{k+1}(M, \Lambda)$ のみで決まる。 \square

証明過程により以下も示されている。

Corollary 1.13. 3つ組

$$(T, c, \omega) \in C^k(M, \mathbb{R}) \times C^{k+1}(M, \Lambda) \times \Omega^{k+1}(M) \quad (1.73)$$

であり

$$\delta T = \iota\omega - r_*c \quad (1.74)$$

を満たすものは微分キャラクター $f := p_*T|_{Z_k(M)} \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ を定める。 f は $[T] \in H^k(M, \mathbb{R}), [c] \in H^{k+1}(M, \Lambda)$ にのみ依存する。

ここで、 $\omega \in \Omega^{k+1}(M)$ としたが関係式 $\delta T = \iota\omega - r_*c$ より $\omega \in \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda$ が示されるのは上述の通り。

$v \in H^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ に対して, $v = [s]$ なる $s \in Z^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ をひとつ選び,

$$f = s|_{Z_k(M)} \quad (1.75)$$

とすると, s の取り替え $s \mapsto s + \delta t$ は $\delta t(z \in Z_k(M)) = 0$ より f は s の取り方に依存せず, また $f(\partial\sigma) = 0$ より f は $\delta_1(f) = 0$ なる微分キャラクター. これを

$$H^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{i_1} \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda), \quad v = [s] \mapsto i_1([s]) = s|_{Z_k(M)} \quad (1.76)$$

と書く. 明らかに i_1 は単射. また, s の \mathbb{R} 値への拡張 $p_*\tilde{s} = s, \tilde{s} \in C^k(M, \mathbb{R})$ を取ると, $f = i_1([s])$ の表現は $T_f = \tilde{s}$. このとき $\delta\tilde{s} = -r_*c_f$ によって決まる $c \in C^{k+1}(M, \Lambda)$ のコホモロジー類 $-u_f = -[c_f]$ は, $[s]$ の Bockstein 準同型に他ならない:

$$u_f = -B([s]). \quad (1.77)$$

よって, $f = i_1([s])$ は, $\delta_1(f) = 0, \delta_2(f) = -B([s])$ なる微分キャラクターである. 以下が示された.

Proposition 1.14.

$$\delta_2 \circ i_1 = -B. \quad (1.78)$$

Proposition 1.15. 以下の完全列がある:

$$0 \rightarrow H^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{i_1} \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{\delta_1} \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda \rightarrow 0. \quad (1.79)$$

(証明) i_1 の単射性, δ_1 の全射性, $\delta_1 \circ i_1 = 0$ は既に示した. $f \in \ker \delta_1$, つまり $\omega_f = 0$ とする. $f = p_*T_f|_{Z_k(M)}$ なる表現 T_f を取ると, $\delta T_f = -r_*c_f$. すると

$$\delta T_f(\sigma) = T_f(\partial\sigma) = \delta T_f(\sigma) = -r_*c_f(\sigma) \in \Lambda \quad (1.80)$$

であるから $\delta p_*T_f = p_*\delta T_f = 0$ より, コサイクル $p_*T_f \in Z^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ が定まる. 取り替え $T_f \mapsto T'_f + \delta S$ に対して変化分 $p_*\delta S = \delta p_*S$ はコバウンダリであるから, f はコホモロジー類 $[p_*T_f] \in H^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ を定める. $i_1([p_*T_f]) = p_*T_f|_{Z_k(M)}$ だった. \square

k 形式 $\alpha \in \Omega^k(M)$ に対して,

$$f_\alpha = p_*\iota\alpha|_{Z_k(M)}, \quad (1.81)$$

つまり,

$$f_\alpha(z \in Z_k(M)) = p \left(\int_z \alpha \right) \quad (1.82)$$

と定めると,

$$f_\alpha(\partial\sigma) = p_*\iota\alpha(\partial\sigma) = p_*\iota d\alpha(\sigma) \quad (1.83)$$

であるから f_α は $\delta_1(f_\alpha) = d\alpha$ なる微分キャラクター $f_\alpha \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$. $i_2(\alpha) = f_\alpha$ と書く. $\beta \in \Omega_{\text{cl}}^k(M)_\Lambda$ に対して定義より $\int_{z \in Z_k(M)} \beta \in \Lambda \xrightarrow{p} 0$ であるから i_2 は準同型

$$\Omega^k(M)/\Omega_{\text{cl}}^k(M)_\Lambda \xrightarrow{i_2} \hat{H}^2(M, \mathbb{R}/\Lambda), \quad \alpha \mapsto p_*\iota\alpha|_{Z_k(M)}, \quad (1.84)$$

を定める. $i_2(\alpha) = 0$, つまり任意の $z \in Z_k(M)$ に対して $\int_z \alpha \in \Lambda$ とすると, 特に, 任意の $\partial\sigma \in B_k(M)$ に対して $\int_{\partial\sigma} \alpha = \int_\sigma d\alpha = \iota d\alpha(\sigma) \in \Lambda$ であるから, $p_*\iota$ の単射性より $d\alpha = 0$. よって α は閉形式かつ Λ 周期. したがって i_2 の核は $\Omega_{\text{cl}}^k(M)_\Lambda$ であり, i_2 は単射. また, 表示 $f = i_2(\alpha)$ の表現として $T_f = \iota\alpha$ を取ることができるから, $u_f = \delta_2(f) = 0$.

Proposition 1.16.

$$\delta_1 \circ i_2 = d. \quad (1.85)$$

Proposition 1.17. 以下の完全列がある：

$$0 \rightarrow \Omega^k(M)/\Omega_{\text{cl}}^k(M)_\Lambda \xrightarrow{i_2} \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{\delta_2} H^{k+1}(M, \Lambda) \rightarrow 0. \quad (1.86)$$

(証明) i_2 の単射性, δ_2 の全射性, $\delta_2 \circ i_2 = 0$ は既に示した. $f \in \ker \delta_2$, つまり, $p_*T_f|_{Z_k(M)} = f$ なる T_f に対して $\delta T_f = \iota\omega_f + r_*\delta e$ を仮定する. $\iota\omega_f = \delta(T_f - r_*e)$ であるが de Rham の定理より $\omega_f = d\theta$. よって $\delta(T_f - r_*e - \iota\theta) = 0$ であるからコサイクル $a = T_f - r_*e - \iota\theta \in Z^k(M, \mathbb{R})$ が定まる. 再び de Rham の定理より, $a = \iota\phi + \iota d\eta$ なる $\phi \in \Omega_{\text{cl}}^k(M), \eta \in \Omega^{k-1}(M)$ が存在する. よって,

$$T_f = \iota(\phi + \theta + d\eta) + r_*e. \quad (1.87)$$

したがって,

$$\delta T_f = \iota d(\phi + \theta) + r_*\delta e. \quad (1.88)$$

よって $f = i_2(\phi + \theta) = p_*\iota(\phi + \theta)|_{Z_k(M)}$. \square

次を導入する.

Definition 1.18.

$$R^k(M, \Lambda) := \{(\omega, u) \in \Omega_{\text{cl}}^k(M)_\Lambda \times H^k(M, \Lambda) \mid r_*u = [\iota\omega]\}, \quad (1.89)$$

$$R^*(M, \Lambda) := \bigoplus R^k(M, \Lambda). \quad (1.90)$$

Proposition 1.19. $R^*(M, \Lambda)$ は積

$$(u, \omega) \cdot (v, \phi) = (u \cup v, \omega \wedge \phi) \quad (1.91)$$

に対して環構造を持つ.

(証明)

$$r_*(u \cup v) = r_*u \cup r_*v = [\iota\omega] \cup [\iota\phi] = \iota[\omega] \cup \iota[\phi] = \iota([\omega] \cup [\phi]) = \iota[\omega \wedge \phi] = [\iota(\omega \wedge \phi)]. \quad \square \quad (1.92)$$

Proposition 1.20. 次の完全列がある.

$$0 \rightarrow H^k(M, \mathbb{R})/r_*[H^k(M, \Lambda)] \xrightarrow{i_{12}} \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{(\delta_1, \delta_2)} R^{k+1}(M, \Lambda) \rightarrow 0. \quad (1.93)$$

(証明) 系1.13より (δ_1, δ_2) の全射性はOK. $[T] \in H^k(M, \mathbb{R})$ に対して i_{12} を

$$f = i_{12}([T]) := p_*T|_{Z_k(M)} \quad (1.94)$$

と定義する. $\delta S(z \in Z_k(M)) = 0$ であるから T の選び方には依らない. $\delta T = 0$ であるから $p_*T(\partial\sigma) = p_*\delta T(\sigma) = 0$ となり, $f \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ かつ $\omega_f = 0, u_f = 0$ より $(\delta_1, \delta_2) \circ i_{12} = 0$. $i_{12}([T]) = 0$ とすると $p_*T|_{Z_k(M)} = 0$. よって(1.20)と B_{k-1} の射影性と \mathbb{R} の単射性より $b \in \text{Hom}(C_{k-1}(M), \mathbb{R})$ が存在して $p_*T = p_*b \circ \partial$. よってある $c \in C^k(M, \Lambda)$ が存在して

$$T = \delta b + r_*c. \quad (1.95)$$

$r_*\delta c = \delta T = 0$ より c はコサイクルであり $[c] \in H^k(M, \Lambda)$ を定める. $[T] = r_*[c]$ であるから, i_{12} の核は $r_*[H^k(M, \Lambda)]$.

$f \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ に対して $\delta_1(f) = 0, \delta_2(f) = 0$ とすると, f の表現は $f = p_*T_f|_{Z_k(M)}$ は $\delta T_f = r_*\delta e, e \in C^{k-1}(M, \Lambda)$ となる. したがって T_f はコホモロジー類 $[T_f] \in H^k(M, \mathbb{R})$ を定め, $i_{12}([T_f]) = f$ である. \square

以下が証明された.

Theorem 1.21. 以下の完全列がある.

$$0 \rightarrow H^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{i_1} \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{\delta_1} \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda \rightarrow 0, \quad (1.96)$$

$$0 \rightarrow \Omega^k(M)/\Omega_{\text{cl}}^k(M)_\Lambda \xrightarrow{i_2} \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{\delta_2} H^{k+1}(M, \Lambda) \rightarrow 0, \quad (1.97)$$

$$0 \rightarrow H^k(M, \mathbb{R})/r_*[H^k(M, \Lambda)] \xrightarrow{i_{12}} \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda) \xrightarrow{(\delta_1, \delta_2)} R^{k+1}(M, \Lambda) \rightarrow 0. \quad (1.98)$$

以下が成立する. ここで, i_1, i_2, i_{12} の定義は

$$i_1([s]) = s|_{Z_k(M)}, \quad (1.99)$$

$$i_2(\alpha) = p_*\iota\alpha|_{Z_k(M)}, \quad (1.100)$$

$$i_{12}([T]) = p_*T|_{Z_k(M)}. \quad (1.101)$$

$f \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ の表現を $T_f \in C^k(M, \mathbb{R})$, $f = p_*T_s|_{Z_k(M)}$ とすると,

$$\delta T_f = \omega_f - r_*c_f, \quad \omega_f \in \Omega_{\text{cl}}^{k+1}(M)_\Lambda, \quad c_f \in Z^{k+1}(M, \Lambda). \quad (1.102)$$

δ_1, δ_2 の定義は

$$\delta_1(f) = \omega_f, \quad (1.103)$$

$$\delta_2(f) = [c_f]. \quad (1.104)$$

以下が成立する.

$$\delta_1 \circ i_2 = d, \quad (1.105)$$

$$\delta_2 \circ i_1 = -B. \quad (1.106)$$

B はBockstein準同型.

1.5.1 例：円周束のEuler類

$SO(2) \rightarrow E \xrightarrow{\pi} M$ を円周束 with 接続 θ とし, Ω をその曲率形式とする. $\frac{1}{2\pi}\Omega$ はEuler類を表現するから $\frac{1}{2\pi}\Omega \in \Omega_{\text{cl}}^2(M)_\mathbb{Z}$. 滑らかな閉経路 $\gamma : S^1 \rightarrow M$ に対しては $SO(2)$ ホロノミー $H(\gamma)$ が定義される. 滑らかな閉経路に対して微分キャラクターを $e^{2\pi i}\hat{\chi}(\gamma) = H(\gamma)$ と定義する. 任意のサイクル $x \in Z_1(M)$ に対して微分キャラクターを定義するには, x に対してある滑らかな閉経路 $\gamma : S^1 \rightarrow M$ が存在し

て $x = \gamma + \partial y$ と書くことができるから²,

$$\hat{\chi}(x) := \hat{\chi}(\gamma) + \frac{1}{2\pi} p \left(\int_y \Omega \right) = \hat{\chi}(\gamma) + \frac{1}{2\pi} p_* \iota \Omega(y). \quad (1.109)$$

と定義する. この例では $\delta_1(\hat{\chi}) = \frac{1}{2\pi} \Omega$, $\delta_2(\hat{\chi}) = \chi$ (Euler類).

1.6 次数付き環構造

既に確認したように [3], 細分化作用素 $\Delta : C_k(M) \rightarrow C_k(M)$ が

- 細分化の極限ではカップ積とウェッジ積が等しい :

$$\lim_{n \rightarrow \infty} (\Delta^*)^n (\iota \omega \cup \iota \theta) = \iota(\omega \wedge \theta). \quad (1.110)$$

- $\omega_1 \in \Omega^1(M), \omega_2 \in \Omega^2(M)$ に対して, 次の無限和が収束する :

$$E : \Omega^1(M) \times \Omega^2(M) \rightarrow C^{l_1+l_2-1}(M, \mathbb{R}), \quad \text{bilinear}, \quad (1.111)$$

$$E(\omega \otimes \theta)(x) := - \sum_{i=0}^{\infty} (\iota \omega \cup \iota \theta)(\psi \Delta^i x). \quad (1.112)$$

ここで, ψ は Δ と 1 とのチェインホモトピー :

$$1 - \Delta = \partial \psi + \psi \partial. \quad (1.113)$$

なる性質が順次確認されるならば,

$$E(\omega \otimes \theta) := - \sum_{i=0}^{\infty} (\Delta^*)^i \psi^* (\iota \omega \cup \iota \theta) \quad (1.114)$$

として E は \cup と \wedge をつなぐチェインホモトピーである :

$$\iota(\omega_1 \wedge \omega_2) - \iota \omega_1 \cup \iota \omega_2 = \delta E(\omega_1 \otimes \omega_2) + E d(\omega_1 \otimes \omega_2) \quad (1.115)$$

$$= \delta E(\omega_1, \omega_2) + E(d\omega_1, \omega_2) + (-1)^{l_1} E(\omega_1, d\omega_2). \quad (1.116)$$

特に, 閉形式 ω_1, ω_2 に対しては

$$\iota(\omega_1 \wedge \omega_2) - \iota \omega_1 \cup \iota \omega_2 = \delta E(\omega_1 \otimes \omega_2), \quad \omega_1 \in \Omega_{\text{cl}}^1(M), \omega_2 \in \Omega_{\text{cl}}^1(M). \quad (1.117)$$

また,

$$(\Delta^*)^n E(\omega_1 \otimes \omega_2) = E(\omega_1 \otimes \omega_2) + \sum_{i=0}^{n-1} (\Delta^*)^i \psi^* (\iota \omega_1 \cup \iota \omega_2) \quad (1.118)$$

であるから,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} (\Delta^*)^n E(\omega_1 \otimes \omega_2) = 0. \quad (1.119)$$

いくつか準備する.

² サイクル $x \in Z_1(M)$ の元は定義から, 境界を持たない 1 チェインのことであり, k チェインとは非退化立方体

$$\sigma : I^k \rightarrow M, \quad \text{smooth}, \quad (1.107)$$

の整数係数の線形結合

$$x = \sum_i n_i \sigma_i, \quad n_i \in \mathbb{Z}, \quad \partial x = \sum_i n_i \partial \sigma_i = 0. \quad (1.108)$$

よって, x そのものが滑らかであるとは限らない. 一方で, なんらかの滑らかな閉経路 $\gamma : S^1 \rightarrow M$ と up to バウンダリで一致するため, $x = \gamma + \partial y$ と書くことができる.

- $r : \Lambda \rightarrow \mathbb{R}$ の積との可換性 $r(xy) = r(x)r(y)$ により, r_* はコチェインレベルのカップ積と可換である:

$$r_*c_1 \cup r_*c_2 = r_*(c_1 \cup c_2). \quad (1.120)$$

- コチェインレベルでは, カップ積は次数付き可換でもなければ推移的でもない. しかし, コホモロジーでは一致する. チェインホモトピーを

$$H : C^*(M, A) \otimes C^*(M, A) \rightarrow C^{*-1}(M, A), \quad (1.121)$$

$$f \cup g - (-1)^{\deg(f)\deg(g)} g \cup f \quad (1.122)$$

$$= \delta H(f \otimes g) + H(\delta(f \otimes g)) \quad (1.123)$$

$$= \delta H(f, g) + H(\delta f, g) + (-1)^{\deg(f)} H(f, \delta g), \quad (1.124)$$

$$K : C^*(M, A) \otimes C^*(M, A) \otimes C^*(M, A) \rightarrow C^{*-1}(M, A), \quad (1.125)$$

$$(f \cup g) \cup h - f \cup (g \cup h) \quad (1.126)$$

$$= \delta K(f \otimes g \otimes h) + K(\delta(f \otimes g \otimes h)) \quad (1.127)$$

$$= \delta K(f, g, h) + K(\delta f, g, h) + (-1)^{\deg(f)} K(f, \delta g, h) + (-1)^{\deg(f)+\deg(g)} K(f, g, \delta h), \quad (1.128)$$

などと書く.

- 一方で, 微分形式のカップ積の非可換性は E で書くことができる. (1.116)より

$$\iota\omega_1 \cup \iota\omega_2 - (-1)^{l_1 l_2} \iota\omega_2 \cup \iota\omega_1 \quad (1.129)$$

$$= -\delta E(\omega_1 \otimes \omega_2 - (-1)^{l_1 l_2} \omega_2 \otimes \omega_1) - Ed(\omega_1 \otimes \omega_2 - (-1)^{l_1 l_2} \omega_2 \otimes \omega_1) \quad (1.130)$$

$$= -(\delta E + E\delta)(\omega_1 \otimes \omega_2 - (-1)^{l_1 l_2} \omega_2 \otimes \omega_1). \quad (1.131)$$

よって,

$$H(\iota\omega_1 \otimes \iota\omega_2) = -E(\omega_1 \otimes \omega_2 - (-1)^{l_1 l_2} \omega_2 \otimes \omega_1). \quad (1.132)$$

つまり,

$$H \circ (\iota \otimes \iota) = -E \circ (\text{id} - (-1)^{l_1 l_2} \tau). \quad (1.133)$$

ただし,

$$\tau : \Omega^* \otimes \Omega^* \rightarrow \Omega^* \otimes \Omega^*, \quad \omega_1 \otimes \omega_2 \mapsto \omega_2 \otimes \omega_1 \quad (1.134)$$

は braiding.

- 微分形式の推移律の破れも E を用いて表現できる. $\omega_1, \omega_2, \omega_3$ をそれぞれ l_1, l_2, l_3 形式とすると,

$$(\iota\omega_1 \cup \iota\omega_2) \cup \iota\omega_3 - \iota\omega_1 \cup (\iota\omega_2 \cup \iota\omega_3) \quad (1.135)$$

$$= (\iota(\omega_1 \wedge \omega_2) - (\delta E + Ed)(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota\omega_3 - \iota\omega_1 \cup (\iota(\omega_2 \wedge \omega_3) - (\delta E + Ed)(\omega_2 \otimes \omega_3)) \quad (1.136)$$

$$= \iota(\omega_1 \wedge \omega_2 \wedge \omega_3) - (\delta E + Ed)((\omega_1 \wedge \omega_2) \otimes \omega_3) \quad (1.137)$$

$$- (\iota(\omega_1 \wedge \omega_2 \wedge \omega_3) - (\delta E + Ed)(\omega_1 \otimes (\omega_2 \wedge \omega_3))) \quad (1.138)$$

$$- ((\delta E + Ed)(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota\omega_3 + \iota\omega_1 \cup ((\delta E + Ed)(\omega_2 \otimes \omega_3)) \quad (1.139)$$

$$= -(\delta E + Ed)((\omega_1 \wedge \omega_2) \otimes \omega_3 - \omega_1 \otimes (\omega_2 \wedge \omega_3)) \quad (1.140)$$

$$- ((\delta E + Ed)(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota\omega_3 + \iota\omega_1 \cup ((\delta E + Ed)(\omega_2 \otimes \omega_3)). \quad (1.141)$$

1 行目は

$$-(\delta E + Ed)((\omega_1 \wedge \omega_2) \otimes \omega_3 - \omega_1 \otimes (\omega_2 \wedge \omega_3)) = (\delta A + Ad)(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3), \quad (1.142)$$

$$A = -E \circ (\wedge \otimes \text{id} - \text{id} \otimes \wedge) \quad (1.143)$$

と書くことができる。2行目第1項は

$$((\delta E + Ed)(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota \omega_3 \quad (1.144)$$

$$= (\delta E(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota \omega_3 + E(d(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota \omega_3 \quad (1.145)$$

$$= \delta(E(\omega_1 \otimes \omega_2) \cup \iota \omega_3) - (-1)^{l_1+l_2-1} E(\omega_1 \otimes \omega_2) \cup \iota d\omega_3 + E(d(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota \omega_3 \quad (1.146)$$

$$= \delta(E(\omega_1 \otimes \omega_2) \cup \iota \omega_3) + (-1)^{l_1+l_2} E(\omega_1 \otimes \omega_2) \cup \iota d\omega_3 + E(d(\omega_1 \otimes \omega_2)) \cup \iota \omega_3 \quad (1.147)$$

$$= (\delta B + Bd)(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3). \quad (1.148)$$

ただし,

$$B = \cup \circ (E \otimes \iota). \quad (1.149)$$

同様に, 2行目第2項は

$$\iota \omega_1 \cup (\delta E + Ed)(\omega_2 \otimes \omega_3) \quad (1.150)$$

$$= (-1)^{l_1} \delta(\iota \omega_1 \cup E(\omega_2 \otimes \omega_3)) - (-1)^{l_1} \iota d\omega_1 \cup E(\omega_2 \otimes \omega_3) + \iota \omega_1 \cup Ed(\omega_2 \otimes \omega_3) \quad (1.151)$$

$$= (-1)^{\deg(\omega_1)} \delta(\iota \omega_1 \cup E(\omega_2 \otimes \omega_3)) + (-1)^{\deg(d\omega_1)} \iota d\omega_1 \cup E(\omega_2 \otimes \omega_3) + \iota \omega_1 \cup Ed(\omega_2 \otimes \omega_3) \quad (1.152)$$

$$= (\delta C + Cd)(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3). \quad (1.153)$$

ただし,

$$C(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3) = (-1)^{\deg(\omega_1)} (\cup \circ \iota \otimes E)(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3) \quad (1.154)$$

とした。つまり,

$$C = \cup \circ (((-1)^{\deg} \circ \iota) \otimes E) \quad (1.155)$$

である。実際,

$$(\delta C + Cd)(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3) \quad (1.156)$$

$$= \delta C(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3) + C(d\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3) + (-1)^{\deg(\omega_1)} C(\omega_1 \otimes d(\omega_2 \otimes \omega_3)) \quad (1.157)$$

$$= (-1)^{\deg(\omega_1)} \delta(\cup \circ \iota \otimes E)(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3) \quad (1.158)$$

$$+ (-1)^{\deg(d\omega_1)} (\cup \circ \iota \otimes E)(d\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3) + (\cup \circ \iota \otimes E)(\omega_1 \otimes d(\omega_2 \otimes \omega_3)) \quad (1.159)$$

が確認できる。以上より,

$$(\iota \omega_1 \cup \iota \omega_2) \cup \iota \omega_3 - \iota \omega_1 \cup (\iota \omega_2 \cup \iota \omega_3) = (\delta D + Dd)(\omega_1 \otimes \omega_2 \otimes \omega_3), \quad (1.160)$$

$$D = A - B + C = -E \circ (\wedge \otimes \text{id} - \text{id} \otimes \wedge) - \cup \circ (E \otimes \iota) + \cup \circ (((-1)^{\deg} \circ \iota) \otimes E). \quad (1.161)$$

つまり,

$$K \circ (\iota \otimes \iota \otimes \iota) = -E \circ (\wedge \otimes \text{id} - \text{id} \otimes \wedge) - \cup \circ (E \otimes \iota) + \cup \circ (((-1)^{\deg} \circ \iota) \otimes E), \quad (1.162)$$

変数を入れると,

$$K(\iota \omega_1 \otimes \iota \omega_2 \otimes \iota \omega_3) = -E((\omega_1 \wedge \omega_2) \otimes \omega_3) + E(\omega_1 \otimes (\omega_2 \wedge \omega_3)) \quad (1.163)$$

$$- E(\omega_1 \otimes \omega_2) \cup \iota \omega_3 + (-1)^{\deg(\omega_1)} \iota \omega_1 \cup E(\omega_2 \otimes \omega_3) \quad (1.164)$$

が成立する。

Definition 1.22. $f \in \hat{H}^k(M, \mathbb{R}/\Lambda)$, $g \in \hat{H}^l(M, \mathbb{R}/\Lambda)$ に対してそれぞれの表現 $f = p_* T_f|_{Z_k(M)}$, $g = p_* T_g|_{Z_l(M)}$ を取る.

$$f \star g := p_* (T_f \cup \iota \omega_g - (-1)^k \iota \omega_f \cup T_g - T_f \cup \delta T_g + E(\omega_f, \omega_g))|_{Z_{k+l+1}}. \quad (1.165)$$

つまり, $f \star g$ は表現が

$$T_{f \star g} = T_f \cup \iota \omega_g - (-1)^k \iota \omega_f \cup T_g - T_f \cup \delta T_g + E(\omega_f, \omega_g) \quad (1.166)$$

によって与えられる微分キャラクターである. $u_g = [c_g]$ の表現を選んで以下のようにも書ける.

$$T_{f \star g} = T_f \cup r_* c_g - (-1)^k \iota \omega_f \cup T_g + E(\omega_f, \omega_g). \quad (1.167)$$

性質を順番に確認する. 以下, Up to $\text{im } \delta$, $\text{im } r_*$ での等式をそれぞれ \sim_δ, \sim_r と書き, up to $\text{im } \delta + \text{im } r_*$ の等式を $\sim_{\delta, r}$ と書く. (以下, $E(\omega_1, \omega_2)$ と $E(\omega_1 \otimes \omega_2)$ の記号のゆらぎがあるが, どちらも同じ意味.)

Proposition 1.23. $f \star g$ は表現 T_f, T_g の取り方に依存しない.

(証明) T_f, T_g の不定性は

$$T_f \mapsto T_f + r_* d_f + \delta s_f, \quad d_f \in C^k(M, \Lambda), \quad s_f \in C^{k-1}(M, \mathbb{R}), \quad (1.168)$$

$$T_g \mapsto T_g + r_* d_g + \delta s_g, \quad d_g \in C^l(M, \Lambda), \quad s_g \in C^{l-1}(M, \mathbb{R}). \quad (1.169)$$

この変化に対して

$$T_{f \star g} \mapsto (T_f + r_* d_f + \delta s_f) \cup \iota \omega_g - (-1)^k \iota \omega_f \cup (T_g + r_* d_g + \delta s_g) \quad (1.170)$$

$$- (T_f + r_* d_f + \delta s_f) \cup \delta (T_g + r_* d_g + \delta s_g) + E(\omega_f, \omega_g) \quad (1.171)$$

$$= T_{f \star g} + (r_* d_f + \delta s_f) \cup \iota \omega_g - (-1)^k \iota \omega_f \cup (r_* d_g + \delta s_g) \quad (1.172)$$

$$- T_f \cup \delta (r_* d_g + \delta s_g) - (r_* d_f + \delta s_f) \cup \delta (T_g + r_* d_g + \delta s_g) \quad (1.173)$$

$$= T_{f \star g} + r_* d_f \cup \iota \omega_g + \delta (s_f \cup \iota \omega_g) - (-1)^k \iota \omega_f \cup r_* d_g + \delta (\iota \omega_f \cup s_g) \quad (1.174)$$

$$- T_f \cup \delta r_* d_g - (r_* d_f + \delta s_f) \cup (\delta T_g + \delta r_* d_g) \quad (1.175)$$

$$= T_{f \star g} + r_* d_f \cup (\iota \omega_g - \delta T_g) + \delta (s_f \cup \iota \omega_g) - (-1)^k \iota \omega_f \cup r_* d_g + \delta (\iota \omega_f \cup s_g) \quad (1.176)$$

$$- (-1)^k (\delta (T_f \cup r_* d_g) - (\iota \omega_f - r_* c_f) \cup r_* d_g) - (r_* d_f + \delta s_f) \cup \delta r_* d_g - \delta s_f \cup \delta T_g \quad (1.177)$$

$$= T_{f \star g} + r_* d_f \cup r_* c_g + \delta (s_f \cup \iota \omega_g) + \delta (\iota \omega_f \cup s_g) \quad (1.178)$$

$$- (-1)^k \delta (T_f \cup r_* d_g) - (-1)^k r_* c_f \cup r_* d_g - (r_* d_f + \delta s_f) \cup \delta r_* d_g - \delta s_f \cup \delta T_g \quad (1.179)$$

$$= T_{f \star g} + r_* (d_f \cup c_g - (-1)^k c_f \cup d_g - d_f \cup \delta d_g) \quad (1.180)$$

$$+ \delta (s_f \cup \iota \omega_g + \iota \omega_f \cup s_g - (-1)^k T_f \cup r_* d_g - s_f \cup \delta r_* d_g - s_f \cup \delta T_g). \quad (1.181)$$

ここで,

$$\delta (T_f \cup r_* d_g) = \delta T_f \cup r_* d_g + (-1)^k T_f \cup \delta r_* d_g \quad (1.182)$$

$$= (\iota \omega_f - r_* c_f) \cup r_* d_g + (-1)^k T_f \cup \delta r_* d_g \quad (1.183)$$

を用いた. よって, $T_{f \star g}$ の変化は表現の不定性であるから, $f \star g$ は well-defined.

また注意として, 表記(1.167)において $u_g = [c_g]$ の不定性 $c_g \mapsto c_g + \delta d_g$ は, T_g の不定性の一部. \square

Proposition 1.24. $f \star g$ は確かに微分キャラクターである.

$$f \star g \in \hat{H}^{k+l+1}(M, \mathbb{R}/\Lambda). \quad (1.184)$$

つまり, ある $\omega \in \Omega^{k+l+1}(M)$ が存在して $(f \star g) \circ \partial = p_* \iota \omega$.

(証明) 表現レベルで確認すれば良い.

$$\delta(T_f \cup r_* c_g - (-1)^k \iota \omega_f \cup T_g + E(\omega_f, \omega_g)) \quad (1.185)$$

$$= \delta T_f \cup r_* c_g + \iota \omega_f \cup \delta T_g + \delta E(\omega_f, \omega_g) \quad (1.186)$$

$$= (\iota \omega_f - r_* c_f) \cup r_* c_g + \iota \omega_f \cup (\iota \omega_g - r_* c_g) + \iota(\omega_f \wedge \omega_g) - \iota \omega_g \cup \iota \omega_f \quad (1.187)$$

$$= \iota(\omega_f \wedge \omega_g) - r_*(c_f \cup c_g). \quad (1.188)$$

$$r_* c_f \cup r_* c_g = r_*(c_f \cup c_g) \quad (1.189)$$

に注意. よって, $f \star g$ は

$$\delta_1(f \star g) = \omega_{f \star g} = \omega_f \wedge \omega_g, \quad (1.190)$$

$$\delta_2(f \star g) = u_{f \star g} = u_f \cup u_g \quad (1.191)$$

なる微分キャラクターである. □

Proposition 1.25.

$$f \star g = (-1)^{(k+1)(l+1)} g \star f. \quad (1.192)$$

(証明) 表式

$$T_{g \star f} = T_g \cup r_* c_f - (-1)^l \iota \omega_g \cup T_f + E(\omega_g, \omega_f) \quad (1.193)$$

を

$$T_f \cup r_* c_g \sim_\delta (-1)^{k(l+1)} r_* c_g \cup T_f + H(\delta T_f \otimes r_* c_g) \quad (1.194)$$

$$\sim_r (-1)^{k(l+1)} r_* c_g \cup T_f + H(\iota \omega_f \otimes r_* c_g), \quad (1.195)$$

$$\iota \omega_f \cup T_g \sim_\delta (-1)^{(k+1)l} T_g \cup \iota \omega_f + (-1)^{k+1} H(\iota \omega_f \otimes \delta T_g) \quad (1.196)$$

$$= (-1)^{(k+1)l} T_g \cup \iota \omega_f + (-1)^{k+1} H(\iota \omega_f \otimes (\iota \omega_g - r_* c_g)), \quad (1.197)$$

と比較すると

$$T_{f \star g} - (-1)^{(k+1)(l+1)} T_{g \star f} \quad (1.198)$$

$$\sim_{\delta, r} (-1)^{k(l+1)} r_* c_g \cup T_f + H(\iota \omega_f \otimes r_* c_g) \quad (1.199)$$

$$- (-1)^k ((-1)^{(k+1)l} T_g \cup \iota \omega_f + (-1)^{k+1} H(\iota \omega_f \otimes (\iota \omega_g - r_* c_g))) + E(\omega_f, \omega_g) \quad (1.200)$$

$$- (-1)^{(k+1)(l+1)} (T_g \cup r_* c_f - (-1)^l \iota \omega_g \cup T_f + E(\omega_g, \omega_f)) \quad (1.201)$$

$$= -(-1)^{k(l+1)} \delta T_g \cup T_f + (-1)^{(k+1)(l+1)} T_g \cup \delta T_f + H(\iota \omega_f \otimes r_* c_g) \quad (1.202)$$

$$+ H(\iota \omega_f \otimes (\iota \omega_g - r_* c_g)) + E(\omega_f, \omega_g) - (-1)^{(k+1)(l+1)} E(\omega_g, \omega_f) \quad (1.203)$$

$$\sim_\delta H(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g) + E(\omega_f, \omega_g) - (-1)^{(k+1)(l+1)} E(\omega_g, \omega_f) \quad (1.204)$$

であるが, これは(1.132)よりゼロ. □

Proposition 1.26.

$$(f \star g) \star h = f \star (g \star h). \quad (1.205)$$

(証明) f, g, h をそれぞれ k, l, m 次の微分キャラクター, 表現をそれぞれ T_f, T_g, T_h とする.

$$T_{(f \star g) \star h} = T_{f \star g} \cup r_* c_h - (-1)^{k+l+1} \iota \omega_{f \star g} \cup T_h + E(\omega_{f \star g}, \omega_h) \quad (1.206)$$

$$= (T_f \cup r_* c_g - (-1)^k \iota \omega_f \cup T_g + E(\omega_f, \omega_g)) \cup r_* c_h - (-1)^{k+l+1} \iota(\omega_f \wedge \omega_g) \cup T_h + E(\omega_f \wedge \omega_g, \omega_h) \quad (1.207)$$

$$= (T_f \cup r_* c_g) \cup r_* c_h - (-1)^k (\iota \omega_f \cup T_g) \cup r_* c_h + E(\omega_f, \omega_g) \cup r_* c_h \quad (1.208)$$

$$- (-1)^{k+l+1} \iota(\omega_f \wedge \omega_g) \cup T_h + E(\omega_f \wedge \omega_g, \omega_h). \quad (1.209)$$

一方で,

$$T_{f \star (g \star h)} = T_f \cup r_* c_{g \star h} - (-1)^k \iota \omega_f \cup T_{g \star h} + E(\omega_f, \omega_{g \star h}) \quad (1.210)$$

$$= T_f \cup r_*(c_g \cup c_h) - (-1)^k \iota \omega_f \cup (T_g \cup r_* c_h - (-1)^l \iota \omega_g \cup T_h + E(\omega_g, \omega_h)) + E(\omega_f, \omega_g \wedge \omega_h) \quad (1.211)$$

$$= T_f \cup (r_* c_g \cup r_* c_h) - (-1)^k \iota \omega_f \cup (T_g \cup r_* c_h) + (-1)^{k+l} \iota \omega_f \cup (\iota \omega_f \cup T_h) \quad (1.212)$$

$$- (-1)^k \iota \omega_f \cup E(\omega_g, \omega_h) + E(\omega_f, \omega_g \wedge \omega_h). \quad (1.213)$$

比較する.

$$\iota \omega_f \cup (\iota \omega_g \cup T_h) = (\iota \omega_f \cup \iota \omega_g) \cup T_h - \delta K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes T_h) - (-1)^{k+l+2} K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes \delta T_h) \quad (1.214)$$

に注意して,

$$T_{(f \star g) \star h} - T_{f \star (g \star h)} \quad (1.215)$$

$$= E(\omega_f, \omega_g) \cup r_* c_h + (-1)^{k+l} \iota(\omega_f \wedge \omega_g) \cup T_h + E(\omega_f \wedge \omega_g, \omega_h) \quad (1.216)$$

$$- (-1)^{k+l} ((\iota \omega_f \cup \iota \omega_g) \cup T_h - \delta K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes T_h) - (-1)^{k+l+2} K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes \delta T_h)) \quad (1.217)$$

$$+ (-1)^k \iota \omega_f \cup E(\omega_g, \omega_h) - E(\omega_f, \omega_g \wedge \omega_h) \quad (1.218)$$

$$+ \delta K(T_f \otimes r_* c_g \otimes r_* c_h) + K(\delta T_f \otimes r_* c_g \otimes r_* c_h) \quad (1.219)$$

$$- (-1)^k (\delta K(\iota \omega_f \otimes T_g \otimes r_* c_h) + (-1)^{k+1} K(\iota \omega_f \otimes \delta T_g \otimes r_* c_h)). \quad (1.220)$$

さらに $\text{up to } \text{im } \delta, \text{im } r_*$ で変形すると,

$$T_{(f \star g) \star h} - T_{f \star (g \star h)} \quad (1.221)$$

$$\sim_\delta E(\omega_f, \omega_g) \cup r_* c_h + (-1)^{k+l} \iota(\omega_f \wedge \omega_g) \cup T_h + E(\omega_f \wedge \omega_g, \omega_h) \quad (1.222)$$

$$- (-1)^{k+l} (\iota \omega_f \cup \iota \omega_g) \cup T_h + K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes \delta T_h) \quad (1.223)$$

$$+ (-1)^k \iota \omega_f \cup E(\omega_g, \omega_h) - E(\omega_f, \omega_g \wedge \omega_h) \quad (1.224)$$

$$+ K(\delta T_f \otimes r_* c_g \otimes r_* c_h) + K(\iota \omega_f \otimes \delta T_g \otimes r_* c_h) \quad (1.225)$$

$$\sim_\delta E(\omega_f, \omega_g) \cup r_* c_h + (-1)^{k+l} \delta E(\omega_f \otimes \omega_g) \cup T_h + E(\omega_f \wedge \omega_g, \omega_h) \quad (1.226)$$

$$+ K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes (\iota \omega_h - r_* c_h)) \quad (1.227)$$

$$+ (-1)^k \iota \omega_f \cup E(\omega_g, \omega_h) - E(\omega_f, \omega_g \wedge \omega_h) \quad (1.228)$$

$$+ K((\iota \omega_f - r_* c_f) \otimes r_* c_g \otimes r_* c_h) + K(\iota \omega_f \otimes (\iota \omega_g - r_* c_g) \otimes r_* c_h) \quad (1.229)$$

$$\sim_\delta E(\omega_f, \omega_g) \cup r_* c_h + (-1)^{k+l} (-(-1)^{k+l+2} E(\omega_f \otimes \omega_g) \cup \delta T_h) + E(\omega_f \wedge \omega_g, \omega_h) \quad (1.230)$$

$$+ (-1)^k \iota \omega_f \cup E(\omega_g, \omega_h) - E(\omega_f, \omega_g \wedge \omega_h) \quad (1.231)$$

$$+ K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes \iota \omega_h) - K(r_* c_f \otimes r_* c_g \otimes r_* c_h) \quad (1.232)$$

$$\sim_\delta E(\omega_f, \omega_g) \cup \iota \omega_h + E(\omega_f \wedge \omega_g, \omega_h) + (-1)^k \iota \omega_f \cup E(\omega_g, \omega_h) - E(\omega_f, \omega_g \wedge \omega_h) \quad (1.233)$$

$$+ K(\iota \omega_f \otimes \iota \omega_g \otimes \iota \omega_h) - K(r_* c_f \otimes r_* c_g \otimes r_* c_h). \quad (1.234)$$

ここで, $r : \Lambda \rightarrow \mathbb{R}$ の積との可換性より

$$K(r_*c_f \otimes r_*c_g \otimes r_*c_h) = r_*K(c_f \otimes c_g \otimes c_h) \quad (1.235)$$

は $\text{im } r_*$ に入る. また, 残りの項は(1.164)よりキャンセルする. \square

以上より以下も示された.

Proposition 1.27.

$$(\delta_1, \delta_2) : \hat{H}^*(M, \mathbb{R}, \Lambda) \rightarrow R^*(M, \Lambda) \quad (1.236)$$

は環準同型である.

References

- [1] Jeff Cheeger and James Simons, *Differential characters and geometric invariants*, In: Geometry and Topology, pp. 50–80. Springer, Berlin (1985).
- [2] Kiyonori Gomi, *Differential characters and the Steenrod squares*, arXiv:math/0411043.
- [3] 塩崎謙, 「ノート：立方体特異チェイン複体」 https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~ken.shiozaki/doc/cubic_chain.pdf